

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

学園祭を エコでクリーンに



トレイのリサイクルでごみを削減

●法学部 4年次生
西辻 武志 さん



2014年11月1日から4日まで、第37回関西大学統一学園祭が千里山キャンパスで開催された。数々のイベントや展示と並んで、多くの来場者を楽しませてくれたのがバラエティ豊富な模擬店。関西大学では、この模擬店で使用する食器にリサイクル可能なエコトレイを採用している。エコトレイにかかわる実務はすべて、学生ボランティアが行う。西辻武志さんは、100人を超えるボランティアを束ねるリーダーを務めた。

2014年度も連日、非常に多くの来場者でにぎわった統一学園祭。今回は228の模擬店で、合計約10万枚ものエコトレイが使用され、そのうち約8割が回収された。回収された使用済みトレイは製造元の工場に返送され、リサイクル後に再びエコトレイに成型された。

エコトレイの使用が始まったのは2012年度から。経済学部部の良永康平教授のゼミ生有志による発案だった。最初の

年は4日間の会期の後半2日間の使用だったが、前半2日間に比べごみの量がほぼ半減するという大きな効果があった。西辻さんはこの年、ボランティアの一員として参加していた。

「環境問題への関心や学園祭を盛り上げたいという気持ちで参

加したわけではありませんでした。独りよがりになりがちな自分を変えるため、チームで協力して何かを達成する力を身に付けたかったんです。個人個人の目的はさまざまでも、このプロジェクトを成功させたいという思いはみんな共通していました。全員がベストを尽くせば、とてつもない成果が生まれることを実感しましたし、終わった時には達成感で身震いました」

2年目の2013年度には中心的な運営メンバーの一人になった。そして、2014年度は前任者からの指名を受けてリーダーを引き継いだ。

学園祭当日はキャンパス内に12カ所設けられた「ごみステーション」で、ボランティアが来場者に回収方法を案内した。エコトレイは表面がフィルムで覆われており、これをはがして捨てることで、トレイを良好な状態で回収できるようになっている。ごみステーションで回収したエコトレイは凜風館脇の実施本部に集め、枚数を数えた後、ダンボール箱に詰めた。西辻さんも終日ここで作業しながら、リーダーとして全体の運営に目を配らせた。

「1年目に僕が感じた達成感や新しいことにチャレンジする意欲を参加したメンバーも感じてもらえたなら、今回のプロジェクトは大成功」と、西辻さんは思っていた。

学園祭最終日の終了後、すべてのトレイを詰め終え、壁のように箱を積み上げた時、最後まで残ってくれたボランティア達の充実した顔を見て、西辻さんは確かな手応えを感じた。

「関西でも最大規模である関大の学園祭で、エコトレイプロジェクトが成功することの意義は大きいと思っています。本学を参考に取り入れる大学、高校もあるようです。僕自身もこの活動を通じて、エコに対する意識が高まって身近なものへの見方が変わりました。通学時に大学前の通りのごみを拾うこともあります。小さくてもいい、一人ひとりの変化がきっと大きな変化につながっていくと信じています」

エコでクリーンな学園祭を目指して、新しい取り組みを実践する関西大学統一学園祭は、意識の高い学生達によって次回以降もしっかりと支えられていこう。



学生ボランティアのメンバーたち

座布団を 新鮮な生活雑貨に

嵯峨嵐山から暮らし方を提案する

●株式会社プラッツ 代表取締役
加藤 就一 さん —社会学部 1988年卒業—

国内外の観光客でにぎわう京都・嵐山。加藤就一さんが代表を務める株式会社プラッツの店舗は、JR嵯峨嵐山駅から天龍寺へと向かう嵯峨商店街にある。座布団を中心に、小座布団、お昼寝布団、サイコロ枕など、多彩なオリジナル製品と独自の視点でセレクトした生活雑貨をそろえ、海外にもファンを拡大中のユニークなショップだ。



明治から続く寝具店の5代目として生まれた加藤さん。関西大学社会学部では小売マーケティングやパブリシティを学んだ。担当教授からの全面的な信頼を得て、他の学生の発表を批評する役目を与えられたりもした。卒業後はマーケティング関係の



会社で、大型商業施設の出店調査や企画などに携わった後、1992年家業を継いだ。当時の寝具店の多くは店頭で座布団や布団を倉庫のように積み上げるだけだった。これに対して、加藤さんは家具や照明、食器などの雑貨を飾って生活シーンを演出、時代に合った生活スタイルを提案する店に転換。また、オリジナルの新製品の開発にも取り組んだ。中でも着目したのが座布団だった。

「調べてみて、座布団は最も衰退が激しい製品と分かり、これなら何をしようか文句を言

う人はいないと思いました」そして、伝統技術による手作業は頑固に守りながら、既成のルールにとらわれない新製品を次々と生み出した。その代表的商品が、小座布団。今では業界の一般的な呼称となったが、「小座布団」はそもそも加藤さんの発案。日本ではソファを置いても、その座面に座らず、ソファを背もたれにして前の床に座る人が多いことをヒントに、その時に背中にあてるクッションに見え、座布団として使える小座布団を開発した。

人間工学にも基づいて作られた新製品はポップなデザインも手伝い若い女性を中心に支持を広げ、メディアにも度々取り上げられる人気店に成長した。



現在のプラッツは、ネットショップを含めて、外国人の利用者が非常に多い。多いときには店内の客の8割が外国人客になることもある。外国人観光客が増えたのには、人とのオープンな交流を楽しむ加藤さんの人柄も大きい。

ある時、軒先で雨宿りをしていた台湾人を店内に招き入れた。彼らは日本についてのガイドブックの取材をしに京都を訪れていた。加藤さんは、彼らの聞きたい質問を日本語に翻訳したメモと自分の名刺を渡し、それを持って取材先を訪ねるように勧めた。すっかり忘れていたころ、その本が台湾でベストセラーになったと突然彼らが訪ねてきた。今ではその本は中国でも発売されている。おかげで、プラッツを訪れる台湾の観光客が増えただけでなく、加藤さんは中国人達との太いパイプを持つことになった。

近年、中国語圏の観光客の急増と共に、トイレの利用の仕方、陳列した商品の扱いなどでトラブルが各地で目立つようになった。この問題に対して、加藤さんは嵯峨嵐山地区の5商店街でつくる「嵯峨嵐山おもてなしビジョン推進協議会」のメンバーとして、2010年に中国、台湾からの留学生と嵯峨嵐山の商店主などが意見交換するセミナーを企画。これを基に外国人へのおもてなしのヒントを冊子にまとめ、商店街に配布して話題を呼んだ。

「今後は日本の高性能な布団を、購買力の期待できる海外へ売っていくことを寝装寝具界は考えていくべき。当社でもホームページの改良など、海外に販売する仕組みを工夫していきたいですね。世界の動きを知ることもますます重要になっていくので、大学に身に付けた情報を収集する習慣が役に立っています」と話す。老舗の5代目は伝統を継承しつつ革新的な製品で、古都から世界を目指す。